

2001. 5. 23

VOL.

9



『今年度もよろしくお願ひします』

写真後列左より 監事 黒澤信次郎 代表 松下博樹 事務局 渡辺克也
前列左より 事務局(会計) 蓑島礼子 事務局長 大熊久美子

松下さん経営 江別市八紘農場内ハウスにて

発
行

北海道食の自給ネットワーク

札幌市東区北15条東18丁目2-17 榎ワードエム内

TEL (011)789-8880 FAX(011)789-8890

ホームページアドレス <http://www.kirari.com/wm/jk-Site/>

「小麦トラスト」のスタートに思う

北海道大学大学院農学研究科助教 飯 澤 理一郎

北海道食の自給ネット

ワークがこの度「小麦トラスト」をスタートさせると聞く。やみくもな食料・農産物の「輸入自由化」とますます氾濫する輸入農産物を前に、わが「食」と「農」の行く末を憂え、何とか打開の道を探らねば、と思つている者の一人として、心からの敬意と賛意を送りたい。――「農」と「食」を守る正義のトラスト――

「トラスト」などと聞くと、銀行や企業の大規模合併を思い出し、いかがわしいイメージを持つ人があるかも知れない。確かに、辞書を引くと「業種で複数の企業が資本結合によって合同・合併を行うこと。カルテルよりも結合の程度が高い」（岩波書店「広辞苑第五版」と、さも飽くなき「利益の追求」を目指して大型合併を進めることのような書き方を

している。

しかし、ここに言う「トラスト」とはそうした意味では決してない。多分に、それは、今を去る一世紀ほど前、一八九五年にイギリスで始まった「ナショナル・トラスト」、すなわち「歴史的・自然的名勝地を守るため、資金を出し合つて買い支えよう」という市民運動組織の名称からきたものであろう。そこには「利益の追求」などの意味合いは微塵もない。否むしろ、開発などによって膨大な利益を目論む企業の動きに抗して、たとえ少額ずつであっても市民が浄財を出し合い、かけがえのないものを守り、育てて行くこととする崇高な理念が、そこには脈々と流れているのである。もちろん、そこに参加する市民同士の信頼関係がその基礎にあることは言うまでもない（トラスト「trust」には信頼・信任などの意が強く含まれている）。

「小麦トラスト」として、その例に漏れない。小麦は決して歴史的・自然的名勝地ではないし、農業もまたそうではない。しかし、農業と農業が作り出す緑豊かな

景観、そして農産物は我々の暮らしに欠くべからざるものである。周りを荒れ果てた谷地や雑木林だけに囲まれていたら、我々は息苦しくてとても生きていけない。鉄腕アトムや妖怪の世界ではなし、農産物＝食料なしで一日たりとも生きていけないこと、今更言うまでもあるまい。

――今こそ「農」の買い支え運動を――

その「農」が、「自由貿易」「市場原理」「自己責任」を掲げるWTO・新基本法体制の下、今、ひっそりと息を引き取りつつある。激減する農家と激増する「高齢跡継ぎなし」農家、将来展望を失い“自殺”に追い込まれる中堅農民、平場農村にもジワジワと忍び寄る耕作放棄地、そして三十九%にも下がった食料自給率などが、そのことを雄弁に物語つていよう。このまま事態が推移すれば、三〇年から四〇年後、わが農業は消え去り、世にも希な「農」のない国、食料自給率〇%の国＝日本が誕生しているかも知れない。そうなったら、果たしてわが国、国民は存在できるであろうか。とても明るい答えは用意出来そうにもない。なぜなら、

食料自給率〇%とか数%で生きていくためには、その輸入に見合うだけの膨大な外貨を稼ぎ出さなければならぬからである。今でさえ、食料輸入に七兆円、六〇〇億ドル程を費やしているのであるから、一〇〇%輸入となった場合、必要額は一〇兆円、八〇〇〜九〇〇億ドルを下るまい。国際諸機関などが予測するよう
に、価格が二〜三割も上がれば、一二一三兆円、一〇〇〇〜一二〇〇億ドルも用意しなければならぬ。為替相場が「円安」に振れば尚更巨額となろう。

問題は、それだけ巨額の「黒字」を、貿易で未来永劫に稼ぎ出せるかどうかである。その保障はどこにもない。それどころか、最近の銀行や損保・生保の破綻と欧米諸企業による買収や自動車・家電メーカーの動向などを見る限り、わが国の国際競争力は将来大きく落ち込み、最悪、輸出どころの騒ぎではなくなる危険性すら否定できない。外貨なし、国内農業なしでは国民は飢え死ぬか、あるいは国際機関や諸外国の食料援助に頼り、細々と生きていくしかない。第二次大戦後の

「食料危機」の再来、しかも「農」を蔑ろにしてきた「罰」としての再来とでも言えようか。

表層的な「飽食」「グルメ」に溺れて、あるいは一時的な「価格の安さ」に魅せられて、そうした事態を招いては決して守らない。今こそ、わが「食」を確かに「買い支え」、農民が心置きなく農業に精を出せるようにしていかなければならない。それ以外に、わが農業を再び発展的軌道に乗せ、食料自給率を向上させ、如上の不安・懸念を未来永劫的に払拭する道は、見つかりそうにもない。しかも、時は今しかない。一向に収まりそうもない生産費をも大幅に下回る「激安」攻勢の中で、あと数年もすれば、わが「農」はますます衰弱し、農民の生産意欲は決定的に萎えてしまう可能性も否定できないからである。

—これまでの「買い支え」を一步も二歩も進める「トラスト」運動—

これまでも「農」の「買い支え」運動はないわけではなかった。それは、産直

やリング・オーナー制度などとして、意志ある人々によつて様々に試みられ、展開されてきた。また、今、「食」の安全性に疑義を持ち、環境問題の激化に憂える人々によつて、いわゆる「有機農産物」の購買活動もすこぶる活発に展開されている。その意味で、わが農業は、たとえ細流にしか過ぎなかつたとしても、消費者による「買い支え」運動によつて様々に彩られてきたと言つてよい。それらが農家を大いに励まし、厳しくても頑張りうとする気構えを醸成し、より良いものを作ろうという新たなチャレンジ精神を生み出してきたことは疑いない。

しかし、それらの多くは農家の作った農産物の「一部」、リング農家なら穫れたリングの一部、米農家なら収穫された米の一部、を買い支えるという色合いが濃かつた。また、生産費を考慮しているといつても、どこかに「市価」の影がちらついているものが多かつた。周知のように、多くの農家、特に野菜作農家では多作物栽培が一般的であり、また「市価」は昨今、とんでもない水準にまで値下が

りしている。こうした中で「買い支え」運動には今、先人の偉大な伝統を引き継ぎながらも、一歩も二歩も脱皮することが強く求められていたのである。

農家を作ったものではなく、明確な価格保障をしつつ、取引量を決め、農家に「作ってもらおう」とする「小麦トラスト」は、先行の「大豆トラスト」と同様、小麦を対象に「買い支え」運動を大きく前進させるものに他ならない。そこには作られた「商品」＝農産物を、ではなく、農業を「面」で買い支えていこうとする意気込みをヒシヒシと感ずるのである。

《わが国独自の小麦文化を切り開く「小麦トラスト」》

ところで、野菜や米、牛乳、牛肉などではなく小麦だという点に、我々は特別の意味を感じざるをえない。農水省「食料需給表」によれば、わが国の小麦消費量は年一人当たり三二kgほど。主食と言われる米の実に半分ほどにも達している。しかし、その国内生産量は六〇万トン程度。その十倍弱、五七〇万トンもの輸入によって、初めてわが国の小麦消費、パ

ン・ラーメン・うどんなどの消費が成り立っているのである。まさに外国を食いつくしていると言つてよい。そればかりではない。ふかふかのパンに象徴されるように、我々の感覚・味覚さえも外国産小麦に席巻されているのである。

周知のように、わが国の小麦はパンには向かないと言われる。しかし、フランスパン、ライ麦パンが典型的に語るように「ふかふか」は決してグローバル・スタンダードではない。その土地土地で穫れた小麦を人々はパンとして食してきたのである。とすれば、たとえ「ふかふか」でなくても、わが国で穫れた小麦でパンを焼く方がグローバル・スタンダードに合っていると云えるのではないだろうか。そうした方向に向けて「小麦トラスト」が動き出すとすれば、それはわが国独自の小麦文化創造へ向けての巨歩となるに違いない。また、それが水田二毛作を復活させ、食料自給率を向上させ、そして農家に希望と勇気を与える灯台となつていくだろうことは疑いない。

「小麦トラスト」の発展に大いに期待

したい。

飯澤理一郎氏プロフィール

一九四八年 山形県長井市生まれ

北海道大学理学部生物学科卒業、農学博士。

名寄女子短期大学講師、専修大学短期大学助教・教授を経て

一九九四年十月 北海道大学農学部助教

大学院大学化に伴い、現在北海道大学大学院農学研究科助教

(研究分野) 食料経済学、食品産業論(著) 『農産加工業の展開構造』

二〇〇一年大月書店『アジアの食料・農産物市場と日本』

二〇〇〇年大月書店『問われるガツト農産物自由貿易』など

リレートーク

この二年間、私は議会活動と同じように農業委員会活
動を行つていますが、今まで私が他の農業委員に対し
感じた事をこのリレートークでたとえますと「おにぎ
り派の農業者が、文句も言わずにハンバーグを黙つて
食べている」状況です。当市の農業委員は選挙で選出
されないためなのか、地域の代表者が順番に委員にな
るせいか少し元気がありません。そのためかどうかわ
かりませんが農地を守るための委員会なのに意見や質問がほと
んど出ません。地方自治体に設置が義務づけられている独立し
た行政機関なのですがその認識が感じられないのです。常に事
務局にお任せスタイルで積極性が感じられません。さらに事務
局が本当にやる気の人がいるかというと、しばしば憤慨するこ

おにぎり派の
自立を目指して

石狩市議会議員 羽田 美智代

としかりです。いいえ、決して私は告発をしているわけではあ
りません。いままでは、そんな流れだったのです。いろいろ知っ
ていながら誰も話さないことが普通だったのです。
しかし、最近異変が起きてきています。委員会もほとんど
私一人だった質問が、他の人も質問をするようになってきまし
た。また、一人一人と話すとき意欲もあるし、今の農業
を真剣に考えているのです。新農業基本法が制定され、
益々、農業者の自主性が問われる時代に入り、今の農
業では経営が出来ない状況が近づいていると感じてい
ます。最近の委員会の問題で、特に私たちの町は札幌
市に近いせいか農地が砂利採取などに一時転用される
ことがあり、そこには良くない業者が絡んでくるケ
ースが目立ちます。農地を守ることが目的でありながら、
農業が苦しい、売れることも出来ない農地を金に換える
ための手段としてこの問題があつてを絶ちません。これ
らを解決するには「自治体の農業施策が進まない現状」
を変える以外ありません。簡単に解決できませんが、
まずは声を上げることです。国や道にまかせっきりの
時代は終わつたのです。農業委員会は決定の場でもあ
るし、方針をつくる事もできるのです。農業者の自立
が一番必要であり、そこに何が必要か市民との議論がなければ
前に進みません。私は農業の専門のことは良く分かりませんが、
少しでも農業者の人が感じている現実をいっしょに共有したい
と思ひ、私の元気をちよつとプレゼントしています。

二〇〇二年 活動方針

大豆プロジェクト

プロジェクトリーダー 五十嵐 美由紀

昨年大豆プロジェクトでは、北海道で初めての大規模な大豆トラストを展開し、その動きは、今年度石狩管内の市町村にも波及し、トラストの輪を広げる事ができました。

また、「枝豆を植えよう体験交流」では、雨と雑草に悩まされましたが、会員の増加や、大豆トラストへの参加などうれしい結果を得る事が出来ました。

このトラストの輪を広げ、参加者の皆さんに農業の現状や、遺伝子組み換え問題等の情報提供を行い、北海道の農畜産物を「買い支える」「食べ支える」という意識を育てるために、今年度も引き続き大豆トラストを行います。また、より多くの方に参加していただくため、生豆や味噌以外の大豆加工品の提供方法の検討や、手軽にできる大豆料理のレシピ紹介等、より一層充実したトラストを目指したいと思います。

年間計画

- 四月 会員各位へ大豆トラスト参加募集の案内発送
- 五月 新聞紙上での一般公募と、昨年の参加者への案内発送

六月 参加申込者へお知らせ発送

七月 ファームレターの発行

九月 トラスト畑の見学と交流会

十月 ファームレター発行

十一月 大豆料理講習会・大豆の発送

十二月 「大豆の消費拡大の可能性を探る」学会（加工流通業者との意見交換会）

三月 味噌の発送

会員の皆さんには、トラストへの参加はもちろん、大豆を使った料理のレシピ・きな粉・水煮・乾燥大豆の活用術、「あつたらしいな便利な大豆加工品」の提案等、ご意見をいただきたいと思えます。（この件については、今後の「てんとう虫」送付時に、調査用紙を同封する予定です。）

この大豆トラストの取り組みが、生産者、消費者、加工流通業者の三者が連携しながら進める、新しい市民運動のあり方を提案し、意識や行動を変えるきっかけとなれば幸いです。それぞれが、それぞれの立場でできることをして行きましょう。きつと何年後か、後ろを振り返ったときに、道がつき大きな流れになっていることを期待して、今年も大豆プロジェクト一同がんばりたいと思えます。

学校給食プロジェクト

プロジェクトリーダー 瀬川 真弓

今年度の学校給食プロジェクトでは、札幌市の学校給食を中心に調査及び情報収集活動と学習会の開催を主にして活動する予定です。

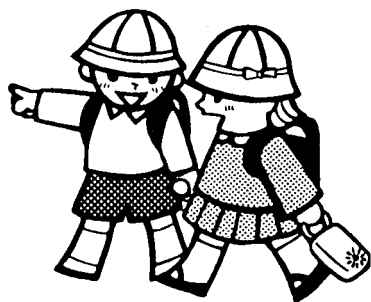
なぜ札幌市かといえば、札幌市の学校給食は十八万食という巨大な市場であるということです。それだけの食数をほぼ毎日同じ内容（単価・栄養価等）で提供するには、食品の基準や入札の仕組み等、私達には知らされていない部分（知ろうとする人も少ないだろうが）が多くあり、そこから見えるくるものから次のステップへ進んでいきたいと思えます。

学習会については、石狩市若葉小学校の給食の残食が少ないという点に注目し、どのような実践で子供達が残さず食べるのか先生に直接聞いてみようということになりました。学校の先生にも学習会に参加していただき、可能であれば同じように指導をしていただいて、変化が見られたかどうかをその後検証できたらと思います。また、そのような取り組みがネットワークの会員の中から広がり、どの学校でも折角の給食が無駄にならぬよう残食が減ってゆけば素晴らしいことだと思います。

親として子供達に一番大切に伝えたい「人間は命を戴いて命をつないでいる」ということを伝えるのがとても難しい今日です。学校でみんなと楽しく食べる給食は年間二〇〇回弱、家族と食べるのは毎日、食指導という点は、学校にお任せしすぎていたのかもしれませんが。毎日の朝食や夕食の中でもつと食のことを語る母になれたらと思います、そういうお母さんが増えて欲しいと望みます。それが人間の生きる力の元と思えます。

「学校で食べているのだから大丈夫なの」ではなく、どんな食事をどんな風に食べているのか、そして、親として今子供達に伝えなければならぬ『食』について考え、その食材や産地についてもつと興味を持って、健全な食生活に近づきたいものです。

プロジェクトからの報告



「はじめまして 北の大地」

北広島市 山口 小百合

この春、江別製粉に入社し、企画・広報の業務を担当いたします山口です。私は昨年十二月、夫婦とも勤めを辞め、北海道での仕事も決まっていけない状態で、周囲の反対を押し切って、東京から移住してきました。

私は大阪市の出身です。幼少時代は光化学スモッグの中を駆け回り、のどが渇くと、日本一汚れた川といわれた「淀川」から採った水道水を飲んでいました。大学に通うため上京してからもお洒落なお店や美味しいお店を探すことには熱心でしたが、食の安全性などは気にしたこともありませんでした。

ところが、ふとしたことからアフリカに行き、ケニアの山奥の中学校で現地の子供達と触れ合う機会を与えられたのをきっかけに、「食料やモノが有り余っている今の日本が異常であり、いつか日本も食料がなくなるときがくるかもしれない。」という不安を感じ、また、ただモノがあることだけが幸せではないと考えるようになりました。

子供も生まれ、食料の安全性や環境問題等について更に興味を持ちましたが、実際はいつ転勤するかも分からないサラリーマン生活でした。夫の仕事も忙しく、終電で帰宅し、休

紹介します この人 こんな話

日出勤も当たり前の日々が続き、家族で過ごす時間は減っていききました。近所に借りた区民農園に行くのもままならず、安らぎの場であるはずの住まいは「環七」という幹線道路沿いの社宅で、騒音と排気ガスで窓も開けられませんでした。理想の暮らしと現実のギャップはひらいていくばかりで悶々としていた時、息子の通う保育園で「本当に生きたがため、今この食をいただきます。与えられたる天地の恵みに感謝いたします。いただきます。」という食前の挨拶を耳にしました。

目を閉じて唱和する子供達の姿が、私達の背中をポンと押してくれました。自然の中で、食と命のつながりについて子供とともに考えられるのは今しかないと思つたのです。

とにかく一番住みたいところに移住しようと、北海道農業担い手センターの主催する「新規就農セミナー」を通して知った移住支援組織「私設北海道開拓使の会」の事務局に相談し、北広島市に家を借りることができました。越してきてまだ四ヶ月ですが、食に関わる仕事に就いてこのような活動に参加することができ、本当に嬉しく思います。皆さんに色々教えていただきながら、会社での仕事である「農産物の販売促進」と、家庭でのポリシーである「可能な限り自給自足」とを軸に、生産者と消費者の交流を深め、お互いの信頼関係を築くお手伝いできれば幸いです。よろしく願いいたします。

「これまでの歩み、これから歩み」

追分町「無何有の郷農園」 小路 健 男

単身、茨城県から北海道へ。ふとんを積みこんだ軽トラックと共にフェリーでこの地に足を踏み入れたのが十二年前。自分が考える「自分の生き方の実現」を目指し、野宿しながらの土地探し。熱意を武器に町や村との交渉。そして一年後ようやくここ追分町で土地を手に入れました。

「肉体、地球環境などの借物によって人生を創る事が出来るのだから、借りた以上は最低同レベルで、大地に返したい。」「本当の自立した自由な暮らしをしたい。」私の情念と理念に正直に矛盾なく生きて行く事で、環境になるべく負荷をかけず、時の偽政者や、社会の流れに縛られず、利害関係に立たず思った事が発言でき、自由販売や価格決定権を持ち、夫婦家族で協力して暮らしを作り、子供には親の背中を見せていられ、自然豊かな大地で心豊かに暮す。自分の生き方の実現。それは、永続可能な農業へ有機農業の實踐をベースにした暮らしをする事だったので。

この地に新規入植して十一回目の春を迎えました。越冬人参の収穫も終わってこれから種蒔きの季節を迎えます。三月に有機認証を取得した三町歩の田畑には、じゃが芋、豆類、



ヤーコンなどを植える予定。田んぼは知人やお客さんを集めて、みんなで田植え。平飼いの鶏を七〇羽飼っていて、これは卵を直接消費者に届けます。豚十頭はやぎと一緒に元気に放牧。これが私の実践している有機農業の世界です。

昨年の八月、無風選挙になるのを黙って見過ごせなく、勢いで立候補、妻と二人で選挙をして当選してしまい町議会議員となりました。有機農業を始めた時から、地域と共に出来ること、地域と共に変っていかれることを考えてきたので、これはいいチャンスと思つて活動しています。

「身土不二」の考えを実践するにはとてもよいテーマと考へ「学校給食に地元産農産物を取り入れてほしい」と働きかけてきました。その甲斐あつてか来年から追分町十三年産のお米を取り入れることに決まりました。また我が家ともう一軒の卵を、スポットとして年何回か取り入れることにもなりました。今後もこのような有機的な広がりも地域で出来ていくことをめざし活動していきます。

今、各地域でばらばらな活動をしている有機農家をネットワークし、有機農協を立ち上げようとしています。有機認証制度の始まりを負擔の始まりと捉えず、一つの力となつてお互いの自立の手助けをしていけたらと考えています。同時に有機農家だけのファーマーズマーケットを7月にオープンさせる予定です。

食品への放射線照射に反対！ 狙われている輸入食糧大国、日本

ポラン広場北海道 笛 木 康 雄

私たちの食卓にあふれている輸入食品。この輸入食糧大
国の日本は、今、放射線照射された食品が、大量に輸入さ
れるという危機に直面しています。

昨年十二月四日、かつての厚生省に食品への放射線照射
の許可申請が提出されました。提出したのは、全日本スパ
イス協会。この協会には、ハウス食品、エスビー食品、ラ
イオンマコーミック等の香辛料の業者が加入。その申請は、
「輸入スパイスに放射線をあて、殺菌・殺虫をしたい」旨
の内容です。何故、放射線を照射しなければならないので
しょうか。

スパイス協会の説明によれば、現在、スパイスが輸入さ
れる際、臭化メチルによって燻蒸され、殺菌・殺虫をして
いるとのこと。しかし、臭化メチルの残留性が問題になり、
二〇〇五年には使えなくなりました。その代わりに、放射線
を使用した、ということだそうです。

現在日本では、放射線の食品への使用は、じゃがいもの

発芽防止に認められているだけで、それすらも、消費者か
ら反対の声があがっています。これまでに放射線のエネルギー
ギーで、食品成分が危険な物質に変化（フリーラジカルな
ど新しい化学物質の生成）することや、動物実験でも奇形
などの異常が確認され、インドや中国の人体実験でも異常
が起ることが報告されているからです。

さらに大きな問題は、放射線照射認可がスパイスだけで
止まらないことにあります。というのは、スパイスの照射
許可申請のうしろに、許可を待っている多数の輸入食料の
影があるからです。公表されているものだけでも、牛肉、
豚肉、七面鳥、卵などの畜産類、農産物にいたっては、な
んと九十四品目にも。

輸入食料は、加工品に相当量使われています。現在、加
工品で原産地表示が義務つけられているのは、梅干とラッ
キョウだけ。放射線照射を待っている九十四品目の農産物
には、ゴマや玉ねぎ、人参等、幅広い食品がラインアップ
されています。それらが、カレーやハンバーグといった
ろいろな加工食品に使われたとしても、表示されませんの
で、知らないで食べてしまう可能性が出てきます。

スパイスの申請に強く反対するக்கும்に、輸入食料に頼っ
ている危険性を伝えていく必要があります。

會員からの

メッセージ

「家庭菜園」

江別市 中原 知子

先週八十二歳になるおじいちゃん(舅)が札幌の西岡から来て一緒に春の畑おこしをしました。昨年から積み込んでいた草や生ゴミの腐ったものを鋤き込みながら約五十㎡の畑を反転しました。途中、畑の小枝を拾い薪ストーブにくべたり、取り残しのジャガイモや人参も出てきました。ほうれん草を作る所は消石灰を撒きました。「こうして反転して十日ほど風と太陽に当ててから種を蒔くから。種芋も芽を出しているし、とうきびは苗を作ったから」と言つて、夕方おじいちゃんは車を運転して帰りました。八十二歳のおじいちゃんも「疲れたな」と、言っていたけれど五十歳の私は、もうドロドロのへつとへつとです。昨年はジャガイモ、人参、大根、枝豆、とうきび、ほうれん草、チンゲンツアイ、トマト、きゅうり、かぼちゃ、それと苺とスイカをは

じめて作りました。苺とスイカは畑にあるだけで、カワイイ! Sweet Spotです。枝豆は「種まき」時の豆を植え、珍しい黒豆の枝豆も食べました。きゅうりとトマトは六人家族でも食べきれないほどの大豊作。黒い土の中から白いじゃがいもがコロコロ出てきた時のホツクリした気持ちは何とも言えません。春菊は、柔らかくて甘くて苦くて、そりゃー美味しいものです。今年はどこに何を植えようか。その前に中沼にあるおじいちゃんの畑へフキを採りに行く約束をしていました。春はホントに忙しい。

「自給率とライフスタイル」

ハヴ札幌市場 中島 隆

▲自給率▼、というと思ひ出すことが二つある。一つは随分前の話。大学(農学部)に入つてすぐの、農業実習の時の出来事。「国内の食料自給率は何%か知っているか?」というもの。当時は穀物ベースで確か計算されていたはずだが、それでも五〇%は切つていたと思う。そして次の質問、「でも実際の自給率はもっと低い。何故だかわかる人」。その時、私は手を上

げずにこう答えた。「牛や鶏の餌になる飼料も輸入しているから」。驚くことにこのカラクリを知っていた学生は私しかいなかった。もう一つは、初めて海外旅行をした時のこと。到着地はタイのバンコック。着陸のため高度を下げた飛行機の窓から、飛び込んできたのはあたり一面の田んぼ、田んぼ。まるで田んぼの中に空港が浮かんでいるという感じ。Thailand Is Rainbowを実感した。北にあがるほどいろいろな問題も見えて着たけれど…。タイは、兎にも角にも世界的にも有名な米輸出大国。経済的には貧しいけれど、気候に恵まれていることもあって、自給的な食生活で飢えることはない。熱帯と温帯という地域差はあるけれど、日本も本来は十分に豊かな食生活をおくれる土地柄であるのに、自給的食生活を放棄してしまつた。経済力にものを言わせてマングローブの林を切り崩し、畑も日本向け作物のために農薬漬けにする。豊かさ」と、それを不思議とも思わない。人間としての感性。あまりにも低い日本の自給率をみるたびに、そのことを思ひ出す。

お知らせ

- ・北海道新聞夕刊コラム欄『プラネタリウム』に大熊事務局長が執筆中。今年度内8回位掲載の予定。第1回は5月2日、第2回は6月中旬頃。
- ・FMノースウェーブ『北の農業歳時記』に運営委員の三田村雅人氏が手紙で出演。毎月第1金曜日の担当でAM10:30分頃放送されています。

イベント紹介

『2001年 田植え体験交流会』

日時 6月3日(日) 10:30田植え開始 ~14:00解散

雨天決行、田植え体験は先着150名

場所 ファームふるさむ 由仁町古山643

TEL 01238-6-2246

参加費 大人2,500円 学生・子供1,000円

内容 手植えでの「田植え体験」、由仁町特産物抽選会、農産物直売、子供広場(竹馬、シャボン玉、卓球等)。

焼き肉を囲んで農作業の実体験や農業者との対話を楽しみ生産者と消費者の交流を深めましょう。11月中旬にはお米引渡し時に、星を見ながら交流を予定!

問い合わせ先 北海道中小企業家同友会事務局 担当 工藤・中村

TEL 011-611-3411 FAX 011-611-9573

編集後記

今年もまた、五月が巡ってきた。

陽射しが強くなり、若葉が萌え、花々がいつせいに爆発したように咲き乱れている。モノトーンだった長い冬を抜け、街にも畑にも野にも色が溢れて、生命力に満ち満ちている季節だ。

私の生命力も、どうやらこの季節に蓄えられているらしい。春、身体の隅々までエネルギーが充電され、気力体力ともに満ち足りたところで、また来年の春まで駆けていく。これが私の、というか、北国の人の身体のカニズムではないかと思うのだが、ちがうかなあ。

(大熊 久美子)

訂正します

二〇〇一・三・一〇発行の「空とぶてんとう虫」第八号に掲載されました、データページ(株)米夢館 向真理子さんの「植物としての稲・食物としての米」の文中で(この野生稲が私たちが食べている栽培稲の祖先といわれるオリザ・サテイバ)をオリザ・ペレニスに訂正します。ご了承下さい。